

## 夏目 漱石「夢十夜」 —第三夜解釈の試み—

五味淵 高志      鉤 治雄

### はじめに

本稿では、夏目漱石の「夢十夜」の第三夜を分析心理学の手法によって解釈した。その結果、物語の多くの要素は両義的に解釈することが出来、従来原罪の不安が主題であるとされた物語は、そのみではなく、「大文字の自己」に象徴される葛藤の統合という創造的側面を含むことが明らかに示された。

「自己」とは定義の困難な動的なコンプレックスであり、あらゆる葛藤を生み出し、統合の原因ともなる。この複雑な過程を、分析心理学では「個性化」と名付けた。「明暗」に認められる他者の受容へとつながるある種の人格の成熟は、「自己」の影響下に生起する「個性化の過程」にごく似たものである。病跡学的には三度の病勢憎悪期を認め、幻覚妄想を含む症状が生涯続いている。仮にそれが統合失調症であるとするならば、これは、ある種の人格の成熟を示したまれな症例とすることが出来る。統合失調症とは、通常意識することのできない根源的な葛藤に不可避免的にさらされた者の心の反応なのではないかと言う、新たな視点を提供していると言うことが出来るのではないか。

### 方      法

第三夜を分析心理学の夢分析の手法に従い、呈示部、展開部、急転部、終結部に分かち、それぞれの要素を拡充法、連想法により概念の拡大を行い、家族歴、生活歴、病歴、時代背景を考慮し全体の解釈を試みる。また、病跡学的考察は本論文の主要テーマではないため必要最小限にとどめる。同様に、漱石の他の作品への言及も限定的なものとする。また論文中の年号は西暦と元号を併記する。

## 結 果

第三夜を呈示部、展開部、急転部、終結部に分ける。

呈示部；深更の青田の道を盲目の幼い子を背負い歩いて行く。闇に鷺が鳴く。雨が降っている。

次に呈示部の夢要素について拡充法、自由連想法を行う。

物語における夜は第一夜に見る暁闇でもなく、第七夜の炎熱がおさまった名月の宵でもない。一点の光も無い夜のように感じられ深更であろう。夜は日常的な意識が抑圧され、無意識が働き出す時刻である。衝動性が高まる一方、高い洞察が訪れるときでもある。怪物達が動き出すのも深夜である。夜のイメージとシンボリズムを述べれば、「死、冬を表すと同時に、エジプトでは死者は夜の闇を通して再生するとされる」<sup>(注1)</sup>。いうまでもなく、夜の航海のイメージである。夜の航海とは、西に沈み東から昇る太陽のイメージに関係を持つ重要な英雄神話の原型である。第三夜における闇は、精神の暗黒を思わせる陰雨の夜である。しかし一方で、夜は生命の再生、更新を連想させる象徴性を持つのである。

青田は幼苗期、出穂機を過ぎた青々とした田であり、季節は初夏であると考えられる。「稲はインド、華南原産の食用作物であり、東南アジアでは主食であり、日本では総摂取カロリーの80パーセントを米から摂っているとされている」<sup>(注2)</sup>。そればかりではなく、中世より近世まで日本が石高制をとっていたことは周知の事実であり、稲作は経済、文明、文化等で生活全般に決定的な影響を及ぼしていたといつてよい。また稲や田に関する祭儀は数多く、稲が穀物神として死と再生の普遍的イメージに重なっているのは確実である。一方、夜陰の田は戯作文学、怪談、落語等、様々な創作では犯罪の舞台として描かれる。一例をあげれば鶴屋南北の「東海道四谷怪談」があり、この劇の発端となる殺人の場は田圃路と設定されている。伝統文学と第三夜との関連は後に詳しく述べる。このように、青田は一方では殺人や怪談の舞台ともなりうる場であり、また生命の、従ってあらゆる文化、宗教の現実的な基盤であり、また死と再生の神話につながる象徴性を持つのである。

次に「盲人は、象徴学的には闇、無知をあらわし、ギリシャでは逆説的に見者をあらわす、つまり現世的な視界を失った代わりに他界への視野が開くとされ、予言をなすものと、予言をあらわす」<sup>(注3)</sup>。また吟遊詩人は、盲人の職業の一つであり詩聖ホメロスは晩年盲目となった。日本でも口承文学の一方の担い手は盲人であり、小泉八雲の「耳無し芳一」の琵琶法師は盲人である。アイヌは文字を持たず、アイヌ神謡は盲人によっても語られる。津軽三味線もまた同様であり、このようなことは普遍的であると思われる。また盲人が針、灸、按摩の優れた治療者になりうるのは古くから知られており、現代でも同様である。つまり盲人は、暗黒の世界を表すとともに、予言

を含む深い洞察、詩人、音楽等の文化の担い手であることを象徴し、また歴史的に治療者としての側面を持つのである。

六才の子を背負っていることについては、子供と、背負うことを別の事項として述べる。童児は、時に救済者として現れる。聖クリストファーは童児を背負って河を渡る途中、背負った子が幼児キリストであると知らされる。つまり世界を背負ったのだとされ、この消息を神話は「小よりも小さく、大よりも大きい」と伝えている。救済者としての童児は、矛盾した両義性を持った存在として現れるということであり、分析心理学では、それを「童児神原型」としている。「童児神はつまらない、見栄えのしない、力のない者として現れ、水、土、石から出生し変容をくりかえして花の中心、曼荼羅の中央に現れ救済者としての姿となってゆくことが多い」<sup>(注4)</sup>。救済者または救済する力が、はじめはとるに足らないものと思われたいというのは、個人においても集団においても良くおこることである。花も曼荼羅も統合の象徴であり、統合をもたらしうる原型を、分析心理学では「大文字の自己」と名付けた。「童児原型」と「自己」の原型の間には、密接な関係があるわけである。統合とは、平明に言って葛藤からの開放であり、個人にとって死活の問題である。従って「童児原型」は、「自己」の原型とあわせて最重要のコンプレックスといてよい。現実的には幼児は無力でとるに足りない存在であるが、発達心理学によれば幼児は性的発達の可能性を含め、多方向に開かれた変容の可能性を萌芽状態のまま保持しているのであり、これは十分に成熟した個人にあらわれうる高度な葛藤の統合の状態に似ているのである。この問題は、後に詳しく述べる。重荷を背負うものについては聖クリストファーの伝説を先に述べた。聖クリストファー伝説とは強力な渡河荷役がある時小さな子供を背負って河を渡る途中、背の子供がだんだんに重くなり、ついに耐えがたい重さになる。この幼児はキリストであり典型的な「童児神原型」である。この伝説は明らかにギリシャ神話におけるアトラスの逸話が起源であり、おそらくさらに古代に源していると思われる。アトラスはゼウスの奸計によって天空を背負う役割に追いやられた神であり、アトラスはなんとかこの役割から逃れようとするが、果たせず、ついに苦痛のため山になってしまう。担いがたいものを担うと言うテーマは、背負ったものが堪えがたいほどに重くなると言うモチーフとあわせて、類話が相当にあると思われる。落語「善光寺」には昼は小さく軽く、夜は大きく重くなる観音像が出てくる。

次に鷲について述べる。この鷲は夜に鳴くのであるから五位鷲であろう。五位鷲と言う和名は、後醍醐天皇が行幸のおり鷲に従五位を贈官したことに由来する。後醍醐天皇の権勢を表す逸話であるが、魔除けの意味もあったのではないかと。「鷲は『日本文徳天皇実録』、『康富記』、柳田国男『野鳥雑記』など不吉な鳥として記されている」<sup>(注5)</sup>。一方、雑司ヶ谷の鬼子母神には疱瘡の治療神である鷲大明神として祀られており、また「鷲大明神は『懷橘談』に出雲にありとされる」<sup>(注6)</sup>。疱瘡の治療神としての鷲信仰は、全国にあったと思われる。ちなみ漱石は三歳時、痘瘡に罹っており、

瘢痕が生涯残っていた。「鷺は西欧では忌むべき鳥とされる一方、キリスト教では悪に敵対するものでもある。これは蛇を捕食するからであろう。古代エジプトでは夜明けにヘリオスの胸から飛び立つ太陽神の化身とされ、再生の象徴とされる」<sup>(注7)</sup>。物語では、鷺は点景にすぎないが、凶兆とばかりは言えないわけである。

雨は全篇を通して降っていると思われるが、音を立てない霧雨であり闇の深さをきわださせる陰雨である。しかしシンボルとしての雨は天からの恵みと、豊穡をもたらすもの、汚れを清めるもの、天と地つなぐもの等、必ずしも暗黒のみをイメージさせるものではない。現実にも、日本では梅雨期がなければ農業は成り立たず、豪雨の被害とあわせて雨もまた、両義性を持つ。心理学では雨の夢やイメージが葛藤の解消の象徴として現れる場合がある。

次に物語の展開部を示し、それぞれの要素について記述する。背負っている盲目の子は自分の子供である。子供をどこかに捨ててしまおうと思ううち、闇の中に森が見える。背中の子が「重いかい」と問う。「重くない」と答えると、背中の子は今に重くなると言う。道は二股に分かれ、八寸角の石の道標にしるされている文字は、イモリの腹の様な赤い色である。背中の子が、左の道が良いだろうと言う。道の彼方には暗い森が見える。背負った盲目の子が自分の子であり、耐えがたい重荷でもあると言うことについては、後に総合的な解釈を行う。

森は象徴学的には人類最初の神殿であり、実際に草木で飾られる神殿がある。アントニオ・ガウディの聖家族教会は、様々な植物の彫刻によって装飾されている。ある種の魔術では、結婚と誕生の場でもある。分析心理学では無意識の象徴であり、従って母のシンボルでもある。生物学的には、人類は森林生活をしていた原猿との共通祖先から分岐したとされ、おそらく人類は非常に長い間、森を生活の拠点としていたと思われる。現在でも木材、食料、薬用植物、狩猟動物の供給の場として森の重要性は普遍的であり、また生態学では、現在の生物種の多くが森に存在していると言われている。また周知のごとく、海とともに森は酸素生成の場として決定的に重要である。一方で、森は殺人等、犯罪の舞台でもあり、ダンテの神曲では自殺者の魂は森の木に閉じ込められ、妖鳥に食われるとされる。このように生と死に関わる森の象徴性は明らかである。

八寸角の石の道標は、永遠性を持った目印といった意味であろう。石柱の寸法は八寸であり、八は「全体性」を表す数であることが知られている。文字の赤は、イモリの腹のような赤と表現されている。赤色の象徴性は、際限も無いほど広い。「エジプトではセトに関わる色とされ、セトは太陽神ホルスの敵対者であり闇黒を表す。ギリシャでは赤い神は太陽の色である。ローマ・カソリックではペンテコステの上祭服の色で炎の舌、つまり炎の様なキリストの言葉を表す。錬金術では『賢者の石』は赤彩であるとされる」<sup>(注8)</sup>。イモリはこの場合、日本の固有種であるアカハライモリであろう。イモリは両生類であり旺盛な繁殖力を持ち、薬効もあるとされる。ある種の原

始的な生命力を連想させる。闇の中に浮かび上がる石柱の赤い文字は、このような複雑な象徴性を持つのである。また道標には、赤い文字で左は日ヶ窪、右は堀田原と記されている。日ヶ窪は、現在の港区の地名で、おそらくやや低地であろう。堀田原は旧華族の堀田邸付近とされる。左は箱庭療法では無意識、内的生活を表現していることが多い。また左は過去、闇、陰、湿り気、死、女性と関係しているとされる。物語では、私は背中の子に促されて、左の道を歩んでゆく。

次に急転部を要約し、同様に拡充と連想法を行う。背中の子を早く捨てようと森への道を急ぐ。背中の子が「丁度、こんな晩だったな」と言う。「何が」と聞くと「知っているじゃないか」と言う。そう聞くと知っているようにも思える。分かっただけだから、分からぬ前に子供を捨てようと森への道を急ぐ。背中の子は自分の過去、現在、未来を悉く照らして、寸分の事実も洩らさない鏡の様に光っている。

子捨て、子殺し、幼児供犠は神話、伝説、史実において普遍的な現象である。Oedipus は父を殺し、王位を奪うという予言によって、出生間もなく捨てられる。Oedipus 劇は王位継承に関わる、父と息子のコンプレックスと言う普遍的なテーマを持ち、このようなニュアンスを帯びた子殺しは、キリストの出生にまつわるヘロデ王の幼児殺し、アーサー王の子殺し等の伝説に現れるだけでなく、現実の歴史にも枚挙の暇の無いほどに多い。Oedipus コンプレックスは、親子間の錯綜した愛憎の関係性であるが、一面、王の新たな分身である子を生け贄にすることによる王の再生と言う原型に関わるのである。

鏡は重要な象徴性を持つ。鏡は水、水面、ガラスと類縁関係にあり、人を含めた万物を映す。鏡像は良く知られるように左右反転しており、古来ある種の神秘性を持っているととらえられた。ナルキッソスの神話は、エコーの泉に映る、自分の姿に魅せられた若者の神話であるが、エコーは泉に映った者の魂を奪う死の女神の側面を持つ。つまり、ここで問題になっているのは、狭義のナルシズムとばかりとは言えず、自身の魂の姿、プシュケーの深みに魅せられる危険性なのである。水晶玉による占いはよく知られているが、もともとは水や水盤が用いられた。日本にも亀鏡による占いがある。多く占いは、個人や共同体の運命の予知に関わる。鏡のたとえは、これにとどまるものではなく、摩訶止観巻一下には、三諦の円融の比喩として用いられている<sup>(注9)</sup>。鏡と鏡像は、そのまま諸法実相の比喩でもあり、従って、仏法における三世の説明にも関係している。背中の子が過去、現在、未来を映して鏡の様に光るのは、故ないことではないのである。夢において、時制が曖昧になることはよく知られており、夢の特徴の一つである混交の一面を形成している。混交は睡眠状態では理性的な判断力が低下するためと説明されることが多い。分析心理学では、時制の曖昧さは、無意識の性格のひとつであり、無意識においては過去、現在、未来という区分がそもそも存在せず、混交と見えるのは意識の分別能力に原因があるとする。

次に終結部を要約して示し、物語の要素について述べる。背中の子が「ここだ。



ちょうどその杉の根の抛だ」と言う。森の中に黒く杉の木がみえる。背中の子が「その杉の根の処だったね」と言う。自分は思わず「ああ、そうだ」と答える。背中の子が「お前がおれを殺したのは丁度百年前だね」と言う。自分は丁度百年前の、こんな闇の晩に、ここで一人の盲人を殺したことを、こつ然と思い出す。途端に背中の子が、石地藏のように重くなった。

「杉は常緑高木で、建築用材の広さと、ある種の芳香と姿の見事さから神木として扱われることも多い。また杉卒塔婆、杉仏として死後の年忌に際して杉を植える風習が各地にある」<sup>(注10)</sup>。「シリア原産の杉は神像を刻むのに使われた。またソロモンの神殿が、杉で作られていたため神聖な木とされる。また、夏至と関係があり王者の威厳を表す。キリストの象徴でもある」<sup>(注11)</sup>。

相原和邦によれば、盲人殺しは伝統文学に多くの例があるとされる。相原は「河竹黙阿弥の『薦紅葉字都谷峠』では、座頭殺しが語られ、終幕の殺人の場は、雨の夜、題目の石塔、森や立ち木、石地藏第三夜に共通する道具立てが見られる。先に述べた三遊亭円朝の『真景累ヶ淵』でも、盲人殺しが語られる。おそらく類話は中世より数多くあり、戯曲、浄瑠璃、落語等の通俗文学に類型があった」としている<sup>(注12)</sup>。また物語の「お前がおれを殺したのは丁度百年前だね」という会話については、「丹後稲の昔話」、関敬吾の「日本昔話集」所載の「昔話の型」、小泉八雲「知らぬ日本の面影」の出雲の民話に同様に台詞があるとしている<sup>(注13)</sup>。

「地藏はもとバラモン教の地神であり、女神であるとされる。仏教に習合されてからは、釈迦滅後、弥勒の世まで無仏の世で六道の民衆を救うとされ、真言密教、浄土宗でも重要視される。鎌倉期以降一般に浸透し、路傍に石像が祭られ、いつか在来の賽の神信仰と融合した。江戸期には賽の神の本地ともされ、旅行安全、子育て、厄病防止、縁結びなどの機能を持つようになり、賽の河原の保護者として村境、辻にあまねく祭られた」<sup>(注14)</sup>。子供が石地藏の様に重くなるという話は「東海道四谷怪談」にある。背負ったものが、金仏であったり、石地藏のように重くなるという民話は少なくないと思われる。

以上、物語の要素について拡充と連想による記載をおこなった。次に、総合的な解釈を試みる。解釈においては、漱石の家族歴、生活歴、病歴、時代背景、他の作品等との関係も考慮する。

「夢十夜」は、明治41年（1908）7月から8月にかけて、朝日新聞に連載された夢の体裁をとった創作とされる。第三夜は、夢とすれば歴然たる悪夢であり、驚愕夢に近い内容を持っている。悪夢や驚愕夢の源泉の一つは、不当に扱われたコンプレックスである。盲目の子は自分の子であり、背負った時期も理由も明らかにされていない。そして、捨てようとしても、捨てることができない。盲人の意味は、この場合、明澄な内的視座であり、文学、音楽等、学問芸術に関係していると思われる。盲人は自分の子であるから、自分の「個性化」に関わる内的発展の可能性ということができる。

つまり、おそらく学術や芸術と関係する、見極めることのできない治癒につながる発達の可能性を漱石は背負っていたのであり、しかも絶えずそれを捨てようとしたのである。この解釈は精力的な、しかも成功した小説家であり、優れた歌人であり、漢詩の名手でもあったよく知られた漱石像と相容れないように思われる。しかし英国留学時、クレイグに個人教授を受ける以外は、索漠たる下宿にこもる自閉的な生活の中で構想された「文学論」を読むと、この解釈も間違いではないことがわかる。

「文学論」は、英国留学時に構想されたが完成には至らず、帰国後、東大英文科で行われた同名の講義が筆録され、漱石が加筆、訂正し完成したものである。全集で 400 頁にもわたる大部の論文であるが、序文では留学時の苦境があからさまに語られ、やや異例に感じられる。内容は文学に限らずさまざまな領域への言及があり、幾何学的図表、統計手法、代数学的記述等が用いられており、一般的な文学論とは趣を異にしている。「文学論」の構想の契機として、池田菊笛と交友があったとされる。池田菊笛は優れた科学者であり、「味の素」の発明者である。ダーウィンの進化論とロベルト・マイヤーの熱力学第一法則の発見に端を発するエネルギー学説は、自然現象の包括的な説明を可能にするものであり、20 世紀初頭のヨーロッパでエポックを形成していた。池田菊笛が急速に発展し、国際化する自然科学の担い手の一人として、楽観的な人生観を持っていたであろうことは、容易に想像される。漱石はうらやみ、「自分も自然科学をやりたくなった」という意味の書簡を残している。また「文学論」を構想していた時期、関根重一への書簡に、「世界をいかに語るべきか、人生をいかに理解するか、そのことから文学の開化を考える」「哲学、政治学、心理学、生物学、等の諸学との関係において文学を論ずる」旨の記述があり、「文学論」の構想がどのようなものであったか、おおよそ推測出来る。このような、ある種の世界解釈につながる文学論を形成することを、大学や政府当局が求めていたとは思われない。漱石は英文学の先駆的な紹介者であればそれで良かったと思われる。これを秀才にありがちな野心とするのは早計である。留学時、漱石は当時としては中年といつてよい年齢であり、社会的には成功者であり、経済的にも貧窮状態にあったとは言えない。開化期の官費留学生であることの責任、圧倒的な英国文明の重圧への対抗意識、先に述べたような時代精神を考え合わせても、不釣り合いなものを感じさせる。

加えて、この時期、漱石は著しい精神衰弱の状態にあったとされるが、実態は迫害妄想と追跡妄想、おそらく自我侵害性の幻聴、感覚の過敏、衝動性の亢進、抑うつ、自閉を内容とする症状に苦しんでいたものであり、政府当局に漱石狂せり、との報が伝えられるほど深刻な状態であった。とうてい学問の野心や、栄達欲が問題になるケースとは思われない。通説では、留学に関わるストレスに加え、「文学論」のごとき巨大な課題を自らに課したことが、神経衰弱の原因とされることが多いが、仮に前述の精神症状が統合失調性の異常であるとすれば、別の解釈が成り立つ。統合失調症の本態は不明であるが、表面に現れる幻覚、妄想等の症状が、異常の本質ではないことは

諸家の一致するところである。統合失調症性の陽性症状の根底には、私見によれば、世界観の崩壊、さらには主観的な世界の喪失があり、日常感覚に即して言えば、自分と家族を含めた、隣人、さまざまな物事に備わる自明性が、本質的な部分で損われるのである。損われた自明性は、そのままにしておくことが出来ず、代替されなければならない。それが自動的におこれば、幻覚や妄想が現れ、より強靱な個人にあっては、例えば世界観の再構成への試みとして現れうるのである。漱石に起こったことは、このようなことであつたと思える。

それでは、前に述べた学問、芸術に関係し、「個性化」に関わる内的発展の可能性を心ならずも背負い、しかもそれを絶えず捨てようとしていることと、この事態はどう関係しているのだろうか。漱石が、心ならずも負い続けなければならなかったものは、現象的にはもはや明らかである。留学時に顕在化したこの統合失調性の障害は、数度の憎悪期を繰り返しつつ生涯続くのである。つまり盲目の子供は、統合失調症性の障害と、少なくとも間接的な関係があるといえるのではないだろうか。盲目の子を、生育過程のつらい現実、望まれない出生と生後間もない里子の境遇、二重拘束的な養父母、実母の早生、実父の功利的判断による実家への再入籍等の現実を受け入れなければならない幼児としての自分であり、この幼児期のトラウマを、漱石は生涯負い続けねばならなかったし、その記憶を絶えず押し殺そうとしていた、と解釈することは容易である。このような特異な生育環境が、精神疾患発症の条件であるのは自明である。

しかし、統合失調症で問題になるのは、前に述べた通り、現実そのものの喪失と崩壊であり、どのような外的環境も、統合失調症の本質的原因とはならない。またこの還元的な解釈には、盲人、子供、重荷を背負うことに多義的な象徴性があるという視点が欠けており、この物語の創造的な側面を見逃していると私は考える。漱石は、学問や芸術に関わる見極めのつかない変化発展の可能性を不可避に背負っていたのであり、その重荷は統合失調性の精神障害を引き起こすほどのものであり、同時に豊かな文学的創造の源泉でもあったと思われる。他ならぬ「文学論」で異彩を放つのは、ロンブローゾを下敷きとした創造を強いられるものとしての悲惨とさえ言える天才像であり、漱石は自らのいく末を予期していたかのようなのである。このような発展の過程を、分析心理学では「個性化」と呼ぶ。個性化の概念を、簡単に述べることは出来ないが、ある種の天才の生涯はその典型であると感じられる。不幸な幼年期、青春期の苦悩、創造の病ともいべき中年期の危機、悲惨と栄光に採られた老年というような天才のイメージは、そのまま漱石の生涯に重なる。「個性化」とは、少なくともある領域における世界観の破壊と創造に関わっているのである。これを個人の内的生活に即して言えば、根本的な人生観の変化であり、宗教的回心であり、成熟と感じられる人格の変化である。体験によれば、このようなことが無償で起こることはなく、我が事終われり、というような内的な死を伴うことが多い。この内的な死から、生の更新が起こ



るとは、必ずしも言えない。天才とは、このような過程が、偶然公共性を持った極めて稀な例だと言うことが出来る。先に述べた通り、「個性化」は「自己」の原型の影響下で起こるとされる。

それでは、「自己」あるいは「大文字のセルフ」とは、どのようなものなのだろうか。分析心理学では「自己」を最重要の原型であるとする。ユングは「自己とは自我と無意識を包摂する全体の中心であるとしている。また、自己は個性化を引き起こすものであり、その目標でもあるとする。一方、自己は経験的な概念であり、哲学的、神学的な概念ではない」<sup>(注14)</sup>。としているが、「自己」そのものの起源や実体についての論述はほとんどないと言ってよい。「自己」は「個性化」の過程において間接的に経験されるものであるとしているわけであるが、象徴としての「自己」は神のイメージ、神聖な動物、子供、小人、若者、老人、花等として、箱庭療法、描画療法、夢分析、さらには幻覚や妄想において稀ならず観察することができ、意識に日常的に影響を及ぼし続けられると思われる。従って、「自己」の概念の大枠を知ることは重要な意味を持っている。

ユングの著作で、「自己」の概念を包括的に扱っているのは「アイオーン」である。「アイオーン」ではキリスト像の歴史的変遷を通して、善と悪の統合を可能にする「自己」の側面を現象学的に記述している。詳細は原著を参照されたいが、私見では善と悪の統合は、例えば井筒俊彦の所論によれば、キリスト教世界のみならず、人類史的なスケールを持つのであり、極めて困難な課題であると思われる。このような意識の変化を可能にする原型として、「自己」は存在するのである。また、アイオーンは、古代ギリシャ語で「時間」を意味し、グノーシスでは超越的な高次の霊を表す。著作では西欧占星術と心理学との関係が論じられているが、占星術を集合意識の投影とし、春分点が黄道十二宮を数千年にかけて移動してゆくことを通して、集合意識の変化の可能性を指摘している。ユングは、占星術における天体の運動を動的な曼荼羅と見ているのであり、「自己」のダイナミズムをこの様な形で示したのである。

一方、「自己」は梵我と訳されることがある。ブリハド・アーランヤカ・ウパニシャッドを出発点として、「我」(アートマン)の概念は深みを増してゆくが、この時代にあって、「心臓内に存在する存在するアートマンは、非常に小さく髪の毛の先端の百分の一のさらに百分の一とされまた時には、小人の如く拇指頭大の大きさ」<sup>(注15)</sup>とされる。他方アートマンは、「空間的な広がりを持ち、あらゆるものに偏在する」<sup>(注16)</sup>とされる。梵我一如の概念は、アートマンのあり方そのものに本来的に内包されていたと言える。聖クリストファーの伝説で、幼児キリストが「小よりも小さく、大よりも大きい」と表現されていたことが思い起こされる。「自己」には、極小と極大の性質を併せ持つ側面があるように思われ、極小は0、極大は無限と言い換えることが出来る。このような自己の性質とある種の数学的事象と物理学との関係は明らかである(ゼノンのパラドクス、ビッグバン仮説)が詳述はしない。「自己」の性

質を形成する要因に、物質的側面があるのではないかと指摘するにとどめる。盲目の子供に象徴される「自己」とは、このようなただならぬ内容を持つのである。一般的に言って、このようなものを、人は背負うことができない。

物語において、私は背中の子を捨てようとして果たせず、かえって百年前の盲人殺しという、真実が明らかになり、悪夢といってよい印象を残す。その理由は背中の子が殺した盲人の転生したものであったこと等が考えられるが、例えば Oedipus 劇がある種のカタルシスを感じさせるのに比して、物語では悪夢のイメージがいや増すばかりである。物語の盲人が、不当に殺された「自己」の象徴だとすれば、当然のことであろう。「自己」の重要性は Oedipus 劇における父と母の象徴性をはるかに超えているからである。物語によれば、漱石は「自己」を百年前に、つまり永劫の過去と感じられる時期に殺しており、それを半ばしか意識していないが故に、「自己」を強いられた形で背負わざるを得なかったと言えるのではないか。しかし、この物語は現実には書かれているのであり、このような事態を、漱石はある程度、意識化していたと考えられる。これが苛烈で悲惨ではあるが、実り多い生を漱石に可能にした理由の一つであると思われる。

## 考 察

由来「夢十夜」が、夢そのものを記したものか、夢を素材とした物語であるのか、純粋な創作であるのかは議論のある処である。物語を解釈するにあたって、実はこのことは重要な問題ではない。その上で「夢十夜」は、夢の持つ特徴をほぼ備えている。良く知られている夢の特徴は、混交、圧縮、多数化、劇化、古代化であろう。混交は第八夜の視覚的イメージに、圧縮は第一夜の天道の急峻な運動に、多数化は第十夜の豚の大群に、劇化は第三夜の民話や伝統文学を思わせる構成に、古代化は第五夜の舞台設定に認めることができる。このような特徴から、「夢十夜」は夢を素材とした物語と考えられる。

病跡学的には、結果で述べた症状を呈する障害として、統合失調症、躁鬱病（双極1型）、いわゆる境界例、神経症、心因反応が考えられる。病勢増悪期は、二十七才時から二十八才時、三十四才から三十九才時、四十六才時から四十九才時とされるが、完全な緩解期はないと思われ、慢性の障害が考えられる。また、病勢増悪期と感情の障害が必ずしも併行しないこと、外因が存在しないと思われる時期にも病勢増悪が見られることから、漱石の疾患は、統合失調症、重症神経症、境界例であった可能性が高い。人格の崩壊が認められないことから、統合失調症に否定的な意見も多いが、マンフレット・プロイラーは、欠陥を残さない病例もあるとしており、統合失調症の可能性を完全に否定することはできない。仮に漱石を生涯苦しめた疾患が統合失調症だとすれば、結論で述べた通り、この疾患は「自己」の原型と深い関係があり、運命的

に根源的な葛藤を背負った者の心の反応である可能性があるのである。これは統合失調症の理解に、新たな視点を開くものである。この視点を敷衍するには、稿を改める必要があるであろう。

最後に、以上の視点から、晩年の漱石の作品について若干考察する。修善寺の大患以降の作品で重要とされるのは「道草」と遺作となった未完の「明暗」である。「道草」は、半自伝小説であり、(片付く事のない)しがらみの中で生きる他のない現実が描かれている。反面、漱石の社会成功者としての側面に、全くと言っていいほどに触れておらず、社会的成功は、漱石の内面では痕跡もとどめていないという印象を受ける。「道草」で漱石が主題としたのは、醜悪と言って良い日常生活の負の側面が、負の側面のまま生存権を持ち、むしろ醜悪さが、計りがたい何事かの意味を帯びてくるという現象であり、晩年の漱石にとって、圧倒的な意味を持っていた故と思われる。

前に、「自己」は小さな、とるに足りない、劣等性を帯びた、場合によって悪としが見えないものとして現れることがあると述べた。これを日常的な生活に即して言い換えれば、ふと横切る思い、重要ではない出来事、さらに言えば、失敗としかとえられぬ経験等と現れうるということである。このように「道草」を日常における「自己」の顕現の物語として読むことも出来るのである。作品では主人公の日常の負の側面への認識は、お住の母性に依って抱き取られて物語は終わる。この母性は、絶対的安著感をもたらすような小児的な母性ではなく、したり顔の男性の悟性を相対化してしまうような女性性である。

「明暗」の主演は、明らかにお延とお秀という女性であり、とくに本来漱石にとって絶えがたい存在であったろうお延の存在感は、鮮烈と言う外にない。ここであつかわれているのは、男性の永遠の課題と言ってよい、女性性への理解と容認であり、私見によれば、根源的な葛藤の統合なしに、このようなことが起こることはないのである。これは自他の容認という、より深い問題へとつながるものであるが、容易ならぬことに、「個性化の過程」と言われるものの終点とはいいがたい。葛藤の統合と終わりのないプロセスだからである。「明暗」と言うタイトルは、それを暗示しているのではないだろうか。

最後に、漱石の死因となった宿痾と言うべき胃潰瘍について述べれば、再発を繰り返し器質化した潰瘍瘢痕部の穿孔を伴う大出血が死因となったのはほぼ確実であるが、迷走神経を介する心身症的相関が比較的明瞭な胃潰瘍においても、精神的な苦悩と病変の因果関係は実は考えられているほど明らかではない。これを「自己」の破壊的な一面の現れとするのは容易だが、心身の相関における「自己」の意味と役割の解明は、無視できぬ将来の課題であると思われる。

注

- (1) アト・ド・フリース イメージシンボル辞典 大修館書店 1992 p.458
- (2) 下中邦彦 国民百科事典、平凡社 1962 p.247
- (3) アト・ド・フリース イメージシンボル辞典 大修館書店 1992 p.67
- (4) C・G・ユング 原型論 紀伊国屋書店 1999 p.171-p.209
- (5) 相原和邦 漱石の研究―表現を軸として 明治書院 1998 p.498-p.499
- (6) 南方熊楠 南方熊楠全集2 平凡社 1998 p.85
- (7) アト・ド・フリース イメージシンボル辞典 大修館書店 1992 p.330
- (8) 前掲書 p.520-p.521
- (9) 関口真大校注 摩訶止観上 岩波書店 2002 p.59
- (10) 下中邦彦編 国民百科事典4 平凡社 1962 p.474-p.475
- (11) アト・ド・フリース イメージシンボル辞典 大修館書店 1992 p.114-p.115
- (12) 相原和邦 漱石の研究―表現を軸として 明治書院 1998 p.499-p.505
- (13) 下中邦彦編 国民百科事典3 平凡社 1962 p.474-p.475
- (14) 前掲書 1962 p.474-p.475
- (15) A・サミュエルズ ユング心理学辞典 創元社 1994 p.64-p.66
- (16) 前掲書 1994 p.64-p.66
- (16) J・ゴンダ インド思想史 岩波書店 2002 p.53

参考文献

- 夏目漱石 日本文学全集、夏目漱石1～5 文藝春秋社 1967.
- C. G ユング アイオーン 人文書院 1980.
- C. G ユング 結合の神秘 人文書院 2005.
- C. G ユング 原型論 紀伊国屋書店 1999.
- C. G ユング 変容の象徴 築摩書房 1998.
- C. A マイヤー 夢の意味 創元社 1989.
- C. A マイヤー 個性化の過程 創元社 1993.
- A. サミュエルズ ユング心理学辞典 1994.
- ラブランシュ / ポンタリス 精神分析用語辞典 みすず書房 1996.
- W. ブランケンブルク 自明性の喪失 みすず書房 1979.
- クルトシュナイダー 臨床精神病理学序説 みすず書房 1989.
- 江藤淳 漱石とその時代第一部より第五部 新潮社 2013.
- 江藤淳 夏目漱石 新潮文庫 2016.
- 相原和邦 漱石の研究―表現を軸として 明治書院 1998.
- アト・ド・フリース イメージシンボル辞典 大修館書店 1992.
- バーバラ・ウオーカー 神話伝説辞典 大修館書店 1992.

- 関口真大校注 摩訶止観. 上下 岩波書店 2002.
- J. ゴンダ インド思想史 岩波書店 2002.
- 佐藤隆信 新潮日本文学アルバム 夏目漱石 新潮社 2014.
- 下中邦彦編 国民百科事典 1～7 平凡社 1962.
- 南方熊楠 南方熊楠全集 2 平凡社 1998.
- 井筒俊彦 井筒俊彦全集 22 慶応義塾出版社 2016.
- 石田光史 野鳥図鑑 ナツメ社 2015.



## **An Interpretation of The Third Night of Ten Nights of Dreams by Soseki Natume**

**Takashi GOMIBUCHI, Haruo MAGARI**

“The Third Night” was interpreted using the methods of analytic psychology.

The results show that many elements of this story can be interpreted in two ways. Although the theme of this story has been considered to be anxiety derived from original sin, it is clearly shown here that it also has a creative aspect, that is, the integration of conflicts which is symbolized as Self.

Self is dynamic complex, which is hard to define and creates many conflicts, but it can be the motive for integration as well. In analytic psychology, this complicated process is called individuation. In “The Light and The Dark”, the last novel by Natume, we can see a certain maturing of personality that can lead to acceptance of others, which is very close to process of individuation that happens under the influence of Self.

Natume went through three periods of serious mental illness, and suffered from various symptoms including hallucination and delusion throughout his life. If his symptoms can be diagnosed as schizophrenia, he may have been a rare case who achieved a certain kind of maturity of personality. His case (or novels)

Offers us a new perspective to understand schizophrenia as a mental reaction of those who are inevitably expose to fundamental conflicts that ordinary cannot be noticed.